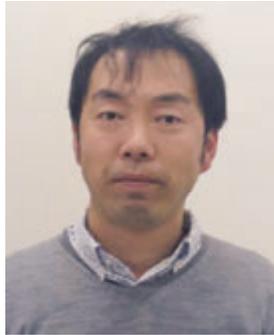


# 心理学 ミュージアム



武蔵野美術大学教養文化・  
学芸員課程 准教授

## 荒川 歩

Profile—あらかわ あゆむ

同志社大学大学院文学研究科博士課程後  
期課程単位修得退学。博士（心理学）。名  
古屋大学大学院法学研究科特任講師など  
を経て現職。専門は心理学史、法と心理  
学。著書は『心理学史』（共編、学文社）、  
『裁判員』の形成、その心理学的解明』  
(ratik) など。

## 心理学という進路と時代性



柏木 恵子 先生



辻 敬一郎 先生



春木 豊 先生



坂野 登 先生



鳥居 修晃 先生



今田 寛 先生

(写真の撮影・インタビュー：高砂 美樹・鈴木 朋子・小泉 晋一・荒川 歩)

日本心理学会教育研究委員会の資料保存小委員会では、名誉会員と終身会員の先生方にご協力いただき、オーラルヒストリーの記録を行っている(70, 71, 73号参照)。73号に掲載された先生方に加えて、新たに今田寛先生と辻敬一郎先生のインタビューを行い、今期の活動を終えた。

さて、個人的な話で恐縮だが、私自身は、自分の有り様や心理学者としての適性に迷うことが多い。お話を伺う前、名誉会員・終身会員の先生方は、教科書・ご研究でも大変著名な先生方であるので、きっと最初から心理学への志があり、迷いなく着実に心理学の道を進まれたのだろうと素朴に思っていた。しかし、実際にお話をお伺いして驚いたのは、思い通りいかなかったことや悩んだこと、偶然に大きな影響を受けたことなどをお話しくださる先生が多いことである。そのご苦勞や困難を、さまざまな場面で語られていたが、ここでは、心理学に進むまでに絞って少し紹介したい。

たとえば宮田洋先生は、理科(医学部や理系へ進学のための旧制高校のコース。現在の大学教養課程にあたる)志望から変わって、経済学部に進学され、それから心理学に移られた。坂野登先生は、新制大学の理学部の教養課程に在籍中に、社会的問題への関心をもたれ、アレキシス・カレルの『人間この未知なるもの』<sup>はやしたかし</sup>や林 麟の「条件反射学」に出会い、文学部への転学部を行なわれた。

また、心理学への思いを秘めつつも諸事情により一度は断念したり、就職して働く中で心理学の必要性を感じて一念発起した先生もいる。たとえば、岩脇三良先生は、心理学を志されながらも、17歳の時の召集によって中断され、ご実家を原爆で失い、敗戦後、大学への入学が決まるも弟様とご自身の生活のために休学を余儀なくされて、その後やっとのことで大学で学ばれた。原一雄先生は、ご家庭の事情もあって、当時授業料が無料であった師範学校に入り、一度は小学校に赴任されてから、勉強への思いを断ち切れずにアメリカに渡られた。山本多喜司先生は、学徒出陣の軍事訓練から復員された後、小学校で教えている中で、心理学の必要性を感じ、心理学に進まれた。

また別の制約もあった。金子隆芳先生は、当時の受験資格の制限から理系に進めず、受験可能であった工業専門学校の機械科に入学した後、戦争を経て家計の事情もあって高等師範学校の数学科に進み、そこで心理学に出会って心理学に進んだ。鹿取廣人先生も、生物学をやりたいと思いながら、当時の受験資格制限に阻まれ、お兄様に外交官を薦められるも、生物学に近いところもある心理学に進まれた。

他方、きっかけはほんの偶然だったと語られる先生もいた。大村政男先生は、国文学が好きで国文学を志望していたが、「友達が『心理学をやっていると、将来、技術将校になれて、死ななくて済むぞ』っていうわけで、そこで、技術将校を目指して、心理学専攻を選んだと話してくださった。山岡淳先生は、医学部浪人をしている際に「生と死との境界は？」等に興味を持っていると、「ある親しいおばさんから『昔から疑問としてきたことは、医学部ではなくても、日大の心理学で取り扱っていて、脳の勉強もできるそうだよ、そこ(新制)の3年次に入れるそうだよ』と言われた」ことをきっかけに心理学に興味を持たれた。また、成瀬悟策先生は、哲学・倫理学・教育学・心理学という序列がある中、戦争で負けたことで哲学の価値観に起こった大きな変化に衝撃を受け、「何か、哲学というものは科学から見ると無駄なことをしているのではないか」と考えて心理学を選ばれた。鳥居修晃先生は、医学部への進学をやめたきっかけの一つとして、人類学科に入った友人に脳の解剖を見せられたことを挙げておられた。どれも時代性にとんだエピソードであり、これがこの先生方に対しては心理学の道へと押し上げるきっかけになった。

これらの話は、時には偶然として語られながらも、そこにはいわゆる苦勞話にとどまらず、それぞれの時代における心理学の位置づけの変化と、時代を超えて問題に対処する知恵や心理学の学問としての位置づけの背景が含まれているように思えてならない。現在、インタビューを文字起こししたものについても、日本心理学会での公開を予定しているので、関心のある方はぜひご覧いただければ幸いである。